

法隆寺・佐伯定胤と渡辺海旭

—— 仏典の伝統的研究と原典研究 ——

西村実則

奈良時代以来、各宗派で仏教の基礎学として位置づけられてきた大きなジャンルに俱舎、唯識があり、この二つを総称して「性相学」と呼ぶ。もともと基礎学とはいえ、仏教の心理分析、人としての行為とその結果、輪廻、世界観など、いわば仏教の根幹に関わる分野であり、しかも難解で高度な思想分野でもある。明治から大正にかけて、文字通りこの学問研究の第一人者であったのは法隆寺にいた佐伯定胤（一八六七—一九五二）である。

この時代はまた、ヨーロッパの仏典を原典から読む研究方法の存在を知った日本が当地に留学生を送り始め、そうした留学生が帰国して原典にもとづく仏教研究を移植しつつある時代であった。ちょうどその時代に定胤は漢文資料に基づく伝統的な俱舎、唯識の研鑽に生涯を捧げたのである。

まず定胤の略歴をあげておこう。

慶応三年（一八六七）、法隆寺村に生まれる。明治十年（一八七七）、十一歳、千早定朝に就いて得度。明治十七年（一八八四）から同二十三年までの計七年間、泉涌寺の佐伯旭雅に師事し、性相学を学ぶ。明治二十三年（一八九〇）

に二十四歳で『法相宗綱要』を著す。この書は島地黙雷等の編集による十二宗派のうち、法相宗を担当してまとめたもの。明治二十六年、法隆寺勸学院開設と同時に院長就任。明治三十四年、薬師寺住職。同三十五年（一九〇三）、法相宗管長。三十六年、法隆寺住職就任。大正十五年、東大講師、講題「唯識三類境（認識の対象をその性質によって三種にわけたもの）」、昭和九年、京都大学講師、講題「唯識学における文義（私注、表現と内容）聚集の過程」。昭和四年、帝国学士院会員。

著書には次のものがある。

『無垢淨光大陀羅尼經訓点和解』

『唯識三類境義本質私記』（これは東大での講義をまとめたもの）

法隆寺は寺伝では聖徳太子が創建したとする（日本古代学の梅原猛は『隠された十字架——法隆寺論——』で太子の霊を鎮魂した寺とする）ため、聖徳太子撰述の『法華經義疏』『勝鬘經義疏』『維摩經義疏』とのちにいう「三經義疏」を最も重視する。その点から『勝鬘經』を書き下したのが次のものである。

『勝鬘經和訳』

『勝鬘經抄』

『勝鬘經講讃』

むろん聖徳太子の生涯、思想に関する概説書も著した。

『推古天皇と玉虫厨子』

『聖徳皇太子』

『法華經義科』

『聖徳太子の憲法』

『十七條憲法と大乘仏教』

次の二つは定胤自身が太子撰のテキストを校訂したものである。

『昭和会本維摩經義疏』

『昭和会本法華經義疏』

定胤自身は『論語』にある「述べて作らず、信じて古えを好む」という立場をとった。新説は立てないという主義であるが、数多くの著作を残している（大田信隆『まほろばの僧——法隆寺佐伯定胤——』）。

佐伯定胤の師佐伯旭雅

定胤の学問上の師は佐伯旭雅（一八二八—一八九一）である。姓は同じであるが、血のつながりはない。定胤は法隆寺村生まれ、旭雅は讃岐（香川県）の人。旭雅は『俱舍論』の研究書『俱舍論名所雜記』明治二十年、六卷）を著した。この書は『俱舍論』の主要な問題を取り上げたもので、自身、

「名高キ名所ハ十六ナレド、一部始終ガ六ツカシイ、三度四度マデ聞テモ見ヤレ、ソレデ解セズバ止メヤンセ」とまでいっている。旭雅には俱舍に関しそのほか、明治一六年（一八八三）、『俱舍論聞書』一卷、明治一七年、『俱舍論古草』、明治二十年（一八八七）、『冠導阿毘達磨俱舍論』三十卷、同年、『俱舍論名所戲言』一卷、明治二九年（二八九四）、『俱舍論分科』三卷、『校訂（俱舍論）光記』『校訂宝疏』それぞれ三十卷がある。旭雅は、のちに南北朝以来の歴代天皇を祀る泉涌寺の住職となった。その学風は中国で『俱舍論』を注釈した普光の学説を重視する点に特色がある。真言宗では伝統的に密教の学問とともに性相学が盛んである。豊山派の寺として長谷寺、智山派では智積院、それに対し、泉涌寺は「泉山」と呼ばれ、旭雅はこの学流を築きあげた人物といっている。「学問をするものはひと時たりともゆるがせにしてはならない」が口ぐせであった。

この旭雅に師事した者はきわめて多い。たとえば大西良慶（のちの清水寺）、佐伯良謙、板橋良玄（のち興福寺住職）、浄土宗でも黒田真洞、勤息義成、大鹿愍成などがいて、いずれも学的に大きな足跡を残した人々たちである。

仏教史上における性相学

江戸時代末期、性相学の一つの伝統は「初瀬」つまり奈良の長谷寺にあった。この流派に林常快道（一七五一—一八一〇）がいた（快道はのちに江戸の根生院に住んだ）。その学風は主として俱舎の注釈書を著した中国の法宝の系統である。

快道の学問的特色の一つはその著『俱舎論法義』にみられるように、『俱舎論』の第九章「破我品」は当初から存在せず、その後に付加されたものと主張した点である（加藤純章「快道師の破我別論説」）。たしかに『俱舎論』の前八章までにはそれぞれに内容を要約した詩（偈）が存在し、第八章の末尾に結びの言葉があつて第九章だけに偈は存在しない。もつとも快道が提起したこの問題は、一九六七年にチベットから『俱舎論』のサンスクリット・テキストが出土し、それは全九章そろつたものであるため、氷解したといえよう。しかしながら漢文資料だけしかない当時、こうした問題が提起されたこと自体、すでに快道が訓詁的、護教的立場からでなく、科学的、批判的立場から仏典研究をしたという点で画期的であつた。

快道以後、性相学の伝統は佐伯旭雅のいた「泉山」つまり泉涌寺にも伝わり、その学風を継承したのが佐伯定胤である。俱舎・唯識の学問が基礎学である以上、各宗で学習されたことは当然であつた。この点は極楽往生と念仏の教えを説く浄土宗、浄土真宗であろうと変わりはない。真宗本願寺派を例にとると、徳川時代以降、夏安居（夏の僧侶研修）で講義されたものに『俱舎論』、『七十五法名目』、『法宗源』、『入阿毘達磨論』、『五事毘婆沙論』、『俱舎論頌疏』、『異

部宗輪論』がある（福原亮嚴「日本の俱舎学者」）。いずれのテキストも『俱舎論』の成立前後、もしくはその要略書である。

定胤の学問と弟子

定胤は京都東山にいた旭雅に入門し、そこで俱舎、唯識を学んだ。この時、旭雅、五十七歳、定胤、十八歳。明治二十年、旭雅が俱舎を講じるために高野山に赴いた際には定胤も一緒に登山した。明治二十四年、定胤二十五歳の時、旭雅は六十四歳で遷化した。そのあとを承けて定胤は泉涌寺で俱舎、清水寺で唯識の「百法問答抄」を講じた。その後、興福寺に移り、最後は法隆寺に戻った（富貴原章信「佐伯定胤老師——法隆寺の故和上を偲んで——」）。

定胤の講義内容は、聖徳太子作の三経義疏、それに俱舎、唯識を主としたものであった。定胤は唯識論書のなかで古来、重視された『成唯識論』、そのほか玄奘の『唯識述記』、慈恩大師基の『唯識枢要』（これは語義の説明でなく、問題点を指摘したもの）、さらに西明寺円測の疏、その弟子道証の唯識論要集、同慧観疏、同玄範疏などいわゆる唯識に関する六家と呼ばれる人びとの注釈書などを扱った（富貴原章信、同）

定胤の弟子たちもその後、多方面で活躍した。佛教大学学長から知恩院門跡となった高島寛我、同じく知恩院門跡となった岸信宏、駒沢大学学長保坂玉泉、高野山大学学長中川善教、大谷大学の富貴原章信、真宗木辺派管長木辺孝慈、東大寺長老鷲尾隆慶、曹洞宗の沢木興道らであり、仏教界、仏教学界を大きく牽引した。

法隆寺勸学院にはこのように各宗から多くの僧侶が学びに来ていたため、当時、法隆寺山内にある塔中寺院が寮に充てられた。曹洞宗は弥勒院、浄土宗は普門院、真宗は宝珠院、真言宗は宗源院、臨済宗は実相院などという具合である。そのほか融通念仏宗、黄檗宗、日蓮宗、とりわけ大正大学からは多い時には十人くらいいたという。定胤の弟子

の一人、真宗高田派の生桑完明が「さまさまの袈裟をかけたる十三宗学侶もろとも師主の子のこと」（生桑完明「法隆寺ゆめうつつ」と詠んだように、宗派毎に異なる袈裟をかけるものの、皆、定胤の子のごとくであると伝えている。勸学院はいまでいう大学院に相当し、開設以来、約三百人が学んだという。

法相宗から聖徳宗へ

法隆寺は聖徳太子が建立したとされるため、聖徳太子の著した三経義疏を教学の柱とする。とはいえ法隆寺は創建当初から仏教全体の学問道場としての性格が濃く、奈良時代の当初から「法隆学問寺」と呼ばれていた（『資材帳』、間中定潤「法相宗から聖徳宗へ——法隆寺佐伯定胤長老の決断——」）。聖徳太子を祀りながら、あらゆる仏教の学問を学ぶ道場というのが当初の姿であった。定胤はそこにおいて三経義疏と俱舍、唯識との双方を講じ続けたのである。ところが定胤は看過し得ない大きな問題に遭遇した。唯識の教えでは「五姓各別」つまり救われない人があると説く。もつとも定胤は直接触れないが、『俱舍論』が成立する前に存在した『大毘婆沙論』にも、

諸の達絮、及び篋戾車人の如きは亦、正性離生に入ること能わざるも、而も悪趣の所撰には非ざるが如し。（『大毘婆沙論』大正蔵二七、八六八頁下）

と、奴隸、異民族はさとの世界に入ることできないとする。また大乘仏教でも『八千頌般若経』には、菩薩大士は辺境の国々に生まれず、チャンダーラ（旃陀羅）の家に生まれず、鳥刺しの家に生まれず、獵師の部族や漁師や屠殺人の家に生まれず、他の似たりよつたりの低い階級や卑しい生業に従事しているものの家に生まれることもないのである（梶山雄一訳）

と、菩薩になれない職業、階級というものがある、つまりそれらを蔑視する精神が看取される。したがって救われな

い人びとがいるとする考え方は唯識以外にも存在していたのである。

ともかく定胤は唯識の「五姓各別」説はすべての人びとの救いを説く聖徳太子の教えとは相入れないと解し、太子を祀るのが法隆寺の法隆寺たるゆえんであるとし、太子の『法華経』『勝鬘経』『勝鬘経』の三経の教えを採り、それまでの「法相宗」の看板を降ろし聖徳太子の名を採って「聖徳宗」と改名したのである。これは当時、同じ法相宗を名乗る清水寺、興福寺にとっては青天の霹靂であった。

人となり

生涯独身であつた定胤は出家後、菜食主義を通した。ある時、三河蒲郡の海辺に一宿した際、当地ではシジミ汁を朝の食卓で飲むのが当地の習慣であつたため、貝は魚でないからよいであろうと出されることがあつた。しかし定胤はそれを飲まなかつたため、周りの者がダシなしの菜っ葉の味噌汁と配慮したり、あるいはラッキョ漬（インドの出家にとって匂い、精力剤の点で禁止された）が出た際、それもさっそく取り除いたという（生桑完明『高田と班鳩』）。生涯、独身であつたから、自炊が多かつた。ある日弟子の一人（生桑完明）が弁当持参で訪問した。

「私（生桑）はお昼前におうかがいした。もちろん弁当を携帯し、時間がきたらひらかせてもらう心算であつた。私が部屋へうかがうと、じきに長老は立つて用達にゆかれた。しばらくすると戻られて四方山のはなしに楽しい時を恵まれているのであつた。西田堂の鐘が十二時を報じた。そこで「一寸失礼して、弁当をいただきます」というと「いやいや、もう御飯がにえておろう。さきにこんろへかけてきたのさ。ちようどごちそうとかけかえてくるから」とお立ちになった。

門下の来訪をうけて、ひそかに米をかし、こんろに火をおこして鍋をかけられたであろう長老の姿を想像して、

勿体なさにむね一ぱいである。おほえずハンカチは目をおおうていた。やがてお手づくりの御馳走をいただいた「百味の飲食」とは、こうしたまごころのこもったものをいうのであろう。私は涙ながらに舌鼓をうった。長老が御自炊のごちそうに満腹した」（生桑完明「定胤長老の印象」）。

この一節から窺えるように、定胤はきわめて清貧な生活を送っていた。仏教で説く無所有、少欲知足の精神を実践したのであろう。

また定胤は訥弁を自認していた。

「咄弁と自認した長老は、いつのまにか咄弁の雄弁となり、真実あふれる温情のこもった大声の説法は、教主の獅子吼さながらであり、聴衆を魅了する不思議な力をもっていた。」（生桑完明「定胤老師の足跡」）。

定胤の話しことばは生まれ故郷の大和弁そのものであった。一般向けの講演での口吻が次のように伝わっている。

「おたがいの心は、もともととは、きれいなものやが、迷いの雲におおわれるために、仏の光がわからんのや。悪に染まったら、なかなかぬけられんのやぞ。しかし、仏の教えを聞いてみると、大きな力に導かれて、ついに涅槃のさとりが得られるのや。よろしいか……聖徳太子さまはこのことを、ついに大明（だいまよう）を得る、とおっしゃっている。」（大田信隆『まぼろばの僧』）

五重塔の修復が終わった際には、次のような感嘆の言葉を発した。「ああ、できた、できた、あんじよう（立派に）できた。ようしてくれた……」。

定胤の人の一面を伝える逸話として、浄土宗僧侶が「南無阿弥陀仏」の六字名号を書いてほしいと依頼することがあった。一般に書には署名するのが常だからである。ところが定胤はいう、「バカやなあお前は。名号は拝むものや。人が拝むものに僧侶といえども、名は書かぬものや。覚えておけよ」（大田信隆、前掲書）。

短身瘦躯の定胤ではあったものの、声には底力があつたという。

渡辺海旭

浄土宗留学生としてドイツに留学し、仏典を原典から研究する方法を学んだ学僧の一人に渡辺海旭（一八七二—一九三三）がいる。この海旭は留学前の一八九七年（明治三十年）に、「奮つて聖典原文に従事せよ」と題する論説を発表している。『法華経』『無量寿経』という天台宗、日蓮宗、浄土宗、浄土真宗などの各宗派で重視する仏典の原本が相次いでネパールなどから発見されていたからである。渡辺海旭はいう、

眼を放つて世界の学者が如何に仏典原文の討究の其全力を傾けしやを思へ、浄土の宝典原文はマクスミューラーの手を着くる所となり、法華経はビュルヌーフ、ケルン等の効果を収むる所となり、巴理の本生経及律藏は、デヴィット、フウスベル等之が先鞭を着け、西蔵も尼波爾の暹羅も緬甸（？）も大抵歐人の研究する所となり了れり（『壺月全集』下）。

ヨーロッパの研究動向を踏まえ、わが国の仏教徒に対して次のようにいう。

古来羅什玄奘等の偉蹟を思ひて今代仏徒の為すなきを思ふに憤慨に勝へざるもの存するなり、吾人仏徒たるもの何ぞ此間に立ちて大に奮はざるを得むや、嗚呼聖典原文の討究は実に仏徒の至大責任なり。（同）

渡辺はこのように意気軒高であつた。經典以外にも唯識のサンスクリット・テキスト、『唯識二十論』『唯識三十頌』がフランスのシルヴァン・レヴィ（一八六三—一九三五）によつて一八九八年から翌年にかけてのネパール旅行で当地の宮殿で発見されていたからである。ちなみに定胤は渡辺海旭より五歳年上、渡辺の前にもう一人ドイツに留学した萩原雲来より二歳年上であつた。

萩原雲来も自身の洋行前に次のようにいう。

其研究の方たるや少数なる耶蘇宣教師を除いては皆宗派的偏見を離れ、博覧篤学著名の学匠にして唯だ人類知識の爲の之を研究し、畢生の能力を尽瘁するなり。故に其研究の結果は頗る依信すべきの價あり。彼に謬あらば我

彼に教ゆべし、我に謬あらば彼に依るべし、何ぞ洋の東西と時の前後とを問はん。而して仏教歴史は其教理を除いては彼に取るべきもの甚だ多く、我の教ゆべきもの甚だ少なし、彼等は実に学問の忠なるものと云べし。彼等の足跡は東洋各国之なきはなし。現に俱舍論研究の目的を以て遠く我国来遊中のモシュウ、レヴィーの如き一人なり。蝸牛角上兄弟相闘ぐの仏子、煩瑣哲学に恋愛たるの法孫、起つて世界の知識に寄与し、世界の幸福を助長するの勇氣なきか（「印度仏教史綱要」）。

荻原もまたわが国の仏教学者は西洋の学者と論戦すべき「勇氣」を持って、やはり勇ましかった。

大正十三年の夏、定胤は外務省対支文化事務局囑託として中国、廬山で開催された世界仏教大会に招かれた。同行したのは当時東大教授であつた木村泰賢、西本願寺の学僧島地大等、薬師寺の橋本凝胤らである。木村はどの本のページにも刻みタバコの粉がこぼれるほどの愛煙家であり、島地も部屋の中で顔が見えなくなるほどのヘビー・スモーカーであつた。たばこを吸わない定胤にとっては迷惑千万であつたらしい（大田信隆、前掲書）。

さて、渡辺海旭は定胤が中国から帰朝した際、定胤に次のような詩を贈っている。

迎法隆寺定胤和上歸朝二首

定胤和上、法相宗管長、深通唯識教義、今夏応招臨支那廬山仏教大会、途次名邑大都、講述三性八識要旨、人莫不嘆服焉、蓋支那佛学者方今專研唯識、所以投機応縁也、惡詩故多用相宗典語、和上我道重信教上人親友、戒律最嚴、受一世歸仰

金錫破禹域。廬山復見遠公真。三性明月西湖夜。八識澄泉東嶽晨。淨戒香薰千界覆。大悲華散一家春。頌功不尽無詩筆。黃菊迎君滌旅塵。

和平功業營綏綽。自有高僧贊經論。兩国雲晴遍計執。一誠月皓実性輪。講論燕市場文化。礼塔金陵資友隣。楓錦滿山迎大士。燦然照映紫衣身（渡辺海旭、『壺月全集』下）。

常日頃、清貧、少欲知足を旨とし、黄色の木綿の衣を着ていた定胤ではあつたが、この詩にあるように正式な場で

は紫衣を着けることがあった。定胤は公の場では盛装をエチケツトとしたのであろう。

フランスのシルヴァン・レヴィがネパールのカトマンドウで入手した唯識のサンスクリット・テキストをフランス帰国後、校訂出版するや、渡辺海旭は「仏教梵文学の研究と巨匠の精進」と題する一文を草している。

パリのシルワンレヴィ教授は両三年前再び尼波羅の首府、カトマンドーに入り、王室図書館に於て図らずも、仏教学篋、僅に五十葉に満たずと雖、大乘仏教特に瑜伽仏教の研究に於ては、一大彗星の光芒陸離、突如、黒暗の空中に出現したりしに似て学界の驚愕讃嘆、近時殆ど之に集中したるの観あり。吾国に於る法相の学壇は論なし。特に最近支那に於て極盛を極むる（略）唯識討究の一派は之が為に多大の刺激を受け、三性八識の学海に雲濤烟浪の一大壯観を現し、延ては仏教学の全体に一大転化を与ふるも謂ふに期待するに難からざらんか。

唯識文献のサンスクリット原本の発見は唯識という仏教学の一部門はいうに及ばず、今後の仏教研究全体に及ぼす影響はきわめて大きいという。

ちなみに渡辺はシルヴァン・レヴィが日本から帰国する際、一片の詩を贈っている。

送禮美博士歸佛蘭西

義林鴻業布英芬。唯識莊嚴發秘文。緑樹薰風阪路泰。東西自仰不窮勳。

渡辺はレヴィによる唯識のテキスト出版について、レヴィの友人、東京帝大教授の高楠順次郎によつて「遠からず其懇切明快の紹介を吾が仏教界に致さんとす」と、いずれ改めてわが国に紹介されるであろうという。

渡辺は先の論稿「仏教梵文学の研究と巨匠の精進」でサンスクリット語による唯識文献、『唯識三十頌』『唯識二十論』が出現したにもかかわらず、性相学を標榜する伝統的な立場からの反応が全くないとしている。これは暗に法相宗、わけても法隆寺を念頭に置いた言説であつたろう。

しかしながら渡辺海旭は定胤の中国からの帰国を讀える賛辞以外にも、次のような定胤自身を讀える詩を贈っている。

和法隆寺法定胤和尚詩韻

化洽春風俗与僧。鎖融結縛固於氷。最歆華甲隆名利。香象青獅任所來。

わが国の仏教界は新発見の原典類を学ぶべきと主張した渡辺ではあったが、このように定胤には最大級の敬意を表している。渡辺の人となりは僚友荻原雲来によると、

君が一生を通じて最も顕著なる美德は「功を他に譲る」と云ふことにあり、隱密に立案し、交渉し、助言し、画策し、指揮し、敢て自ら表面に出でず、而して成功の暁には自ら関与せざる者の如くす。是れ実に君が性格の最も偉大なる所とす、故に不言の間に君に信服せる者甚だ多し。これ全く菩薩の大行と言ふべし（『壺月全集』）。

と、「功を他に譲る」精神があつたという。あるいは仏教時評『新仏教』を主宰した高島米峰（一八七五—一九四九）によれば、

彼は日本仏教界に於ける安全弁であつた。寄ると触ると議論だほれになって、なに一つ纏まらない。日本仏教各宗の間に立つて、ともかくも何事か片附けていたと云ふことは、真に渡辺君の力であつた。彼の居る所そこには平和が伴つていた。浄土宗内に於いてもかなり政争の激しい時代もあつたが、一度渡辺君が顔を出す時、その醜い政争も平和な姿に立ちかへることであつて、宗内と云はず、宗外と云はず日本仏教界は渡辺君によつて、しばしば危なきを救はれたと云ふてよいのである（『同』）。

と、渡辺は救世主のごとき存在という。のみならず、

渡辺君の性格は実に八面玲瓏であつて、全く敵の存在を許さなかつた。一度渡辺君に接する者は皆その徳に服し、一度も渡辺君に接せずして然も彼を敬慕すると云ふた様な者も甚だ少なかつたことは、畢竟彼の八面玲瓏の性格がしからしめたものと云はねばならぬ（『同』）。

と、敵を作らず思いやりの精神があるとされる。それゆゑ、渡辺は伝統的仏教学者定胤に対して最大限の敬意を払つていたのである。

伝統仏教学と海外留学者

定胤は大正十五年（一九二六）二月、東大に招かれて「唯識三類境」これはアーラヤ識の対象に三種の別があることを講じた。招聘したのは、西本願寺の学僧、島地大等であり、友人の印度哲学科の村上専精教授に話し、そのように事が進んだ（大田信隆、前掲書）。

当時の東大にはイギリスのオックスフォードを卒業して帰国した高楠順次郎（一八六六—一九四五）、イギリス、ドイツに留学した木村泰賢（一八八一—一九三〇）、同じくドイツ、イギリスに学んだ宇井伯寿（一八八二—一九六三）が教鞭をとり、いずれもインド哲学一般を視野に入れた講義、研究をしていた。定胤の帝大における講義は、すでにこうしたサンスクリット、パーリ語、チベット語などの原典を中心とした仏典の講義、研究があつた中のことである。

定胤は東大での講義で学生の質問に答えた。

「梵語による研究は私はいたしておりません。それはその道の専門の先生がおられるのだから、その方にきかれるがよろしかろう。そのかわり、漢文の仏典についてのご質問は、どんなものであってもお受けします。」（大田信隆、前掲書）。

このさりげない答えから伝統的仏教学と原典研究のすみわけをみることができる。

東大でこの講義を終えたばかりの定胤という。

大学講義、段々進捗、来（二月）十三日にて修了可仕候、二時間講義、一時間質問応答致候、諸博士の珍奇なる、幼稚なる質問には、只驚き居申候、唯識は従来考へ居たる如き、単純なるものにあらず、中々難関なるものなりとの概念丈与へ申候、兎に角、何れも一生懸命に熱心に聴講申居候（富貴原章信、前掲論文）。

こと唯識、俱舎の教学面に関して、東大の博士たちといえども珍問愚問を連発したというのである。

さて、漢訳にもとづく伝統的研究者と原典研究者の関わりについてみると、法隆寺勸学院で学んだ人であっても、洋行した人もいた。たとえば浄土宗の高島寛我はフランスのシルヴァン・レヴィのもとに留学している。あるいは海外に留学後、日本古来の伝統的仏教学を学ぶ人もいた。真宗高田派専修寺第二十一世となった常磐井堯猷（一八七一—一九五二）はドイツに留学してサンスクリット、パリー語、チベット語による原典研究を学んだが、帰国後、同じ高田派の学頭、加藤行海から伝統的な仏教学を学んでいる。この点は次の記述から知られる。

専修寺第二十一世住持職堯猷上人が欧州から帰朝後、仏教学を指導したのは行海和上であつた。和上は法隆寺の勸学院に招待されて、悉曇の八転声を講義したことがある（生桑完明「定胤長老の足跡」）。

「悉曇の八転声」とはサンスクリットの名詞、代名詞、形容詞、数詞の語尾に、格の異なるにしたがつて八種の変化があることをいう。

専門によつては洋行帰国者であつても勸学院出身者などに学んでいたのである。

こうした事例からみると、佐伯定胤が梵語による研究はその道の専門家に委ねるといったように、伝統仏教学者とヨーロッパに留学した者との間にあつれきはなく、むしろ補完関係にあつたことが垣間見られる。